

JSI Newsletter

VOL. 7 NO. 1 (通巻12号)

発行：日本免疫学会（事務局 〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9 財団法人 日本学会事務センター内）

編集：鳥山 一（東京都臨床医学総合研究所）／小安重夫（慶應義塾大学医学部）／斉藤 隆（千葉大学医学部）／阪口薫雄（熊本大学医学部）／

徳久剛史（千葉大学医学部）／平野俊夫（委員長・大阪大学医学部）／湊 長博（京都大学医学部）

1999年4月1日 Printed in Japan

特集 日本の免疫学研究体制の現状を探る

免疫学会会長就任にあたって

本庶 佑 Tasuku Honjo 京都大学大学院医学研究科

この度、谷口克会長の後任として 1999 年および 2000 年の 2 年間に渡って日本免疫学会の会長をお引受けすることになり、その責任の重さを痛感致しております。日本免疫学会は会員数が 6,332 名（1998年11月25日現在）となり、すでにその数の増加は飽和点に達しております。このような大きな学会の運営が会長一人の意向で大きく変化するという事はまったく期待されません。

会長の役目の第一は、いかに会員の要望を的確に受けとめ、会の運営に反映させるかという組織整備の仕事でありましょう。この点についてはすでに前任の谷口会長がレールを敷かれたように、運営委員会の役割を明確にし、免疫学会の方向を決める上でなるべく広い会員の声を反映させるような組織整備が必要と思われまます。

第二は、免疫学の学問的動向を会員各位が敏感に感じられるような学会運営を行うことでありましょう。免疫学会は数量的には飽和状態にありますので、今後は学会の内容の向上と発展が予想されるところであります。

度々、多くの方が指摘しているように20世紀後半の免疫学は異分野からの情報をいち早く取り入れ、免疫学の重要な問題を次々に解決してまいりました。そして、その成果は生命科学全般にひとつのプロトタイプとして発信され、

多くの学問分野に多大な影響を与えてきました。21世紀に向けて、生物学はゲノム情報を中心とした爆発的な情報量の増大が見込まれ、このような膨大な情報をどのように整理、統合して生物現象の全体を見きわめるかという大きな課題を背負っております。免疫学ももちろんその瀬戸際に立たされており、新しい方向を模索しているというのが現在の姿でありましょう。来世紀に向けて免疫学から他の生命科学分野、また臨床科学分野への情報発信が次々と行われるような活気とダイナミズムに満ち溢れた若々しい免疫学会に再度脱皮する道を模索していく必要があると思っております。免疫学会の運営について若い会員の皆様からの遠慮のないご意見と提案を免疫学会事務局、理事、運営委員、News letter のチャンネルなどを通じてどしどしお寄せいただきますことを期待しております。

私の就任に伴い、庶務担当幹事は渡邊武教授から徳久剛史教授（千葉大学）に、また、会計担当幹事は高津聖志教授から平野俊夫教授（大阪大学）へと大きく若返りました。どうか皆様方のご指導とご支援をお願い申し上げます。

「第29回日本免疫学会総会・学術集会」開催のお知らせ

「第29回日本免疫学会・学術集会」（会長：本庶 佑，副会長：湊 長博，西川伸一）は、下記の予定で開催されます。

日 時：1999年（平成11年）12月1日（水）～3日（金）

会 場：京都市・国立京都国際会館